

「赴任の挨拶にかえて」

校長 鈴木 英史

今年の夏も厳しい暑さが予想されます。同窓会の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。澤田喜之前校長の後を受け責任の重さに身の引き締まる思いであります。もとより微力ではございますが、一意専心職務に精励し、本校の発展に尽力する決意であります。同窓会の皆様の一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

未曾有の大震災から一年が経ち、本格的な被災者復興や原発問題、加えて歴史的な円高をはじめとした経済問題等、混沌とする社会情勢の中、例年より遅い桜が開花する中で、晴れて難関を突破した三百六十名の新入生を迎え、生徒数九百九十八名で新年度が始まりました。

来年で創立五十周年の歴史を迎える本校は、生徒と教職員、そして保護者や同窓生の皆様の長年におたのめいただき、西高ブランド・西高文化を築き、県下屈指の名門校としての地位を確立して参りました。その結果、「子供たちが行きたい学校」「保護者が行かせたい学校」と、地域社会に絶大な信頼を得るに至りました。

私は、四月以来授業や部活動での教員と生徒の様子、PTA行事での保護者の皆様の姿に接するたびに、ここ一宮西高校に集う全ての人が西高を愛し、生徒たちが西高生であることに誇りを持ち、本当に大切にしていることを痛感致しております。そして、これらの思いを自分の思いとして、本校の教育活動の充実と発展のために努力して参りたいと考えています。

さて、禅宗の教えに、「啐啄同時（そつたくどうじ）」という言葉があります。「啐」は、卵の内側から雛が声を発して殻から抜け

出す意思を告げることで、「啄」は親鳥が殻をつついて雛が出るのを助けることを表します。雛が誕生する際に卵の中から声を発しながら殻をつつき、同時に絶妙なタイミングで親鳥が外から殻をつついて雛の誕生を助ける様子を「啐啄同時」は表しています。この鳥の親子の姿を人間の師弟関係に置き換えて、教え導く者と教えられる者が絶妙なタイミングで見事な呼吸を見せ合うという意味でこの表現が引き合いに出されます。

私は、この「啐啄同時」をあらゆる教育活動の場面で実践している学校が西高であると考えています。しかし、生徒たちには、さらなる明確な目標を持って、将来を見据えた粘り強い日々を送ってもらいたいと思っております。殻を破って鳥の雛がかえるのはたつたの一度だけですが、生徒たちには、何度でも殻を破って成長を繰り返してもらいたいのです。ここ西高での三年間は、成長のための挑戦の日々であつて欲しいと考えています。一度や二度の挑戦では破れない殻もあるかもしれませんが、自分の努力と教師のよき導きと励ましにより必ずや殻は破れるものです。生徒一人一人が熱き「青春の志」を胸に秘めて頑張ってくれ

ることを期待しています。私たち教師の厳しくも温かい指導を得て、生徒たちが果敢に挑戦する、このような師弟愛に満ちた、明るく活力に溢れた学校づくりを目指していききたいと考えております。

同窓会の皆様方には、本年度も昨年度と同様に本校の教育にご支援とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

昨年度の総会報告

平成二十三年年度の総会は、年三

宮スポーツ文化センターで行われました。六回生・二十六回生を中心として、総勢八十一名の方々に参加していただきました。ご多忙にもかかわらず、歴代の校長先生をはじめ、懐かしい旧正副担任の先生方、現職員の先生方にもご出席いただきました。残念ながら、一昨年より四十名ほど参加者が減少し、例年より少し寂しい総会となりました。

総会では、平成二十二年度の事業報告・会計報告、役員改選、平成二十三年年度の事業計画・予算案の審議と、滞りなく議事を進めることができました。総会でもご報告させていただいたように、同窓会費及び同窓会報郵送料カンパでは多くの方に協力いただき、重ねてお礼申し上げます。

懇親会は、学年同窓会を担当した六回生・二十六回生に新会員の四十五回生を加え、若々しい雰囲気の中で盛り上がりました。各テーブルでは、昔話に花が咲き、時間が経つのも忘れて旧交を温めることができました。懇親会を締めくくると校歌斉唱も恒例になり、名残りが尽きないままお開きとなりました。

本年は七回生と二十七回生の学年同窓会を開催させていただきました。多数の方が参加していただければと考えております。なお、担当学年にかかわらず、クラス会や部活動のOB会の場合としても同窓会総会を大いに活用していただけたら幸いです。

今年度の総会に、是非皆様お誘い合わせの上、気軽に参加していただきますようお願い申し上げます。

東京支部会の報告

33回生平 大輔(1999年卒)

2011年度の一言

初冬の肌寒さが増す中、総勢12名の関東在住の少数精鋭の卒業生にご出席いただきました。それ故にいつも以上に個人個人と深く話ができて、例年にも増して「絆」という点で実りの大きい会でした。一次会は、新宿西口高層ビルの一室で行いました。引き続き場所を移動しての二次会には、カジュアルな雰囲気の中、旧友や新たに知り合った同窓生との交流を深めました。西高からは、祖父江教頭、水谷教諭のお二方に、はるばる東京までお越しいただきました。現在の西高の様子について報告をいただき、参加者一同、懐かしい思いで母校の近況に耳を傾けました。

本同窓会は、各世代を超えて、学生や社会人がいつでも気兼ねなく参加できる会です。また、私は一つのメリットとして、学生が各企業で活躍されている先輩方々から話を聞き、社会人も学生の後輩方々から話を聞き、「西高生」として「絆」により新たな発見、新たな人脈形成など、私が在籍する会社の創業者の言葉を借りれば、常に「日新たに」そして、「衆知を集める」場になればと願っています。

このように東京で企業や大学などにおいて頑張っている方々から先輩、後輩の方々から刺激を受け、たくさんのエネルギーをもらい与える事ができる場でもあると思います。このような素晴らしい「西高生」の「絆」という伝統を、毎年絶やさずに発展させ続けていきたいと思っております。

今年度よりは、本同窓会を更に飛躍させ、一人でも多くの「西高生」がメリットを共有するべく、その第一歩として例年以上に多くの方々を集まって頂きたいと考えており、

東園在住、または、東京に立ち寄

られる機会のある卒業生の皆様のご参加を、心よりお待ちしております。

一宮西高等学校校歌によせて

木村 斉

作詩の久松潜一先生については先達の諸先生方がいろいろ記されていますので、余り触れないこととします。しかし、旭丘高校に出向いた際、歌碑に久松潜一とあるのをみつけ何かうれしく思った記憶があります。それでは26年間にわたる校歌の研究結果を音楽研究者の立場で発表します。

〈前奏〉前奏のメロディーは6度の跳躍音を繰り返して属七音まで一気に駆け上がり、定番の和音進行に従い4小節で完了する。

〈一メロ〉歌い出しF音(ファ)は発声練習時の歌い出しと同じ高さで歌いやすい。付点八分と十六分の組合せタツカのリズムと後ろの3連符の対比がいい。「光あまねし」

〈二メロ〉ここは伴奏型が8ビートになるのに、メロディーはゆったりと歌われる。このあとのサビ部分を生かす。「心清らに」

〈サビ〉勇ましいタツカのリズムで駆け上がった先で、「瞬平行調」のト短調となるが、「いざいざ！」で主和音に完結する。この部分が1拍ごとに和音が変わるためにすぐ2番、3番に入っても違和感を感じないのです。

〈エンディング〉3番だけに設けられ「いざ！一宮西高校」と歌う部分。ここはいきなり変ホ長調に転調するかと思えば再びト短調の和音、でもそこはちょうど歌詞「にし」を協調しているリミット

校」と讚え、主和音への完結を感じ、歌い終えるのです。